

大学教育再生加速プログラム

テーマ I (アクティブ・ラーニング) ・ II (学修成果の可視化) 複合型

最終報告書

IV 学修成果の可視化

1 はじめに

本取組のテーマの1つは学修成果の可視化である。本学では、2006年から全学の学修到達目標である KUIS 学修ベンチマーク（当時は「KUIS 学修ベンチマーク」。以下、「ベンチマーク」）を策定するとともに、学修成果を蓄積するツールとしてeポートフォリオを導入している。その理由は、多様化する学生の学修意欲を喚起して卒業まで導くことは本学にとって喫緊の課題だったからである。当時、文部科学省の特色 GP の補助事業により、学長自らが米国の大学を視察した。米国では日本よりも早く高等教育のユニバーサル化が進んでおり、リテンションに関する施策を行っていた。この時の視察により、学修の過程において得られた成果や気づきをeポートフォリオに蓄積し、それらをもとに定期的に到達状況のチェックを行い成長の過程を可視化することが有効であるとの示唆を得た。そこで、本学でも初年次教育の一環として、ベンチマークとeポートフォリオを導入したのである。しかしながら、これらのツールを有効に活用する意味合いについては、学生間や教員間に理解の温度差があり、学年が進行するにつれて次第に形骸化していた。

その一方で、中教審では2008年に「学士課程教育の構築に向けて」が答申され、それぞれの大学が三つの方針（学位授与の方針、教育課程の編成・実施の方針、入学者受け入れの方針）の明確化が重要視された。とりわけ学位授与の方針については学修の成果を測定可能なものとして具体的に明示すべきとの方針が打ち出されたのを受け、教学 IR（インスティテューショナル・リサーチ）の考え方が導入され始めた。さらに、2012年の「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～（答申）」では、さらに方針が具体化され、学長の強力なリーダーシップのもとで教学マネジメントを構築し、学生が能動的に授業に参画できるような工夫を行うとともに、学修成果を測定するためのツールを開発することが求められた。

このように、高等教育政策は、学修成果の可視化を後押しするような補助事業や法改正が次々と打ち出されたため、本学ではすでに導入していたベンチマークとeポートフォリオをより有効に活用するため、学修成果の可視化を促進することを本取組の1つの柱として推進してきたのである。

2 本学の学位授与の方針と教育課程編成・実施の方針

2-1. 本学の学位授与の方針に掲げる学修成果

2016年の学校教育法施行規則の改正に伴い、関西国際大学ではベンチマークをベースにして全学レベル及び学科別の学位授与の方針（ディプロマポリシー）を策定し直し、公表している。全学レベルの方針は、126単位の卒業要件単位の修得により、教養と専門知識、そして次の力・資質を育成するというものである。

DP1：自律的で主体的な態度(自律性)

DP2：社会に能動的に貢献する姿勢(社会的貢献性)

DP3：多様な文化やその背景を理解し受け容れる能力(多様性理解)

DP4：問題発見・解決力

DP5：コミュニケーションスキル

DP6：専門的知識・技能 の活用

ここで、DP1、DP2、DP3 は本学の建学の精神に由来するものである。また、DP4、DP5 は汎用的技能と呼ばれ、本学の卒業生がどのような職業についても必要となるものである。さらに、DP6 の専門的知識・技能の活用力は、学部学科により専門分野は異なるものの、修得した知識・技能を活用できることを目標としたものである。この全学レベルの方針を各学科の専門分野の特性に合わせてカスタマイズし、各学科の学位授与の方針として定め、公表している。

2-2. 教育課程編成・実施の方針

学位授与の方針に掲げる学修成果を修得させるため、教育課程編成・実施の方針（カリキュラムポリシー）を定め、カリキュラムを策定している。教育課程編成・実施の方針には、学科ごとに教育内容、教育方法、教育評価に関する方針から成る。全学的な教育内容および教育方法の方針は、おおむね図1に示すとおりである。

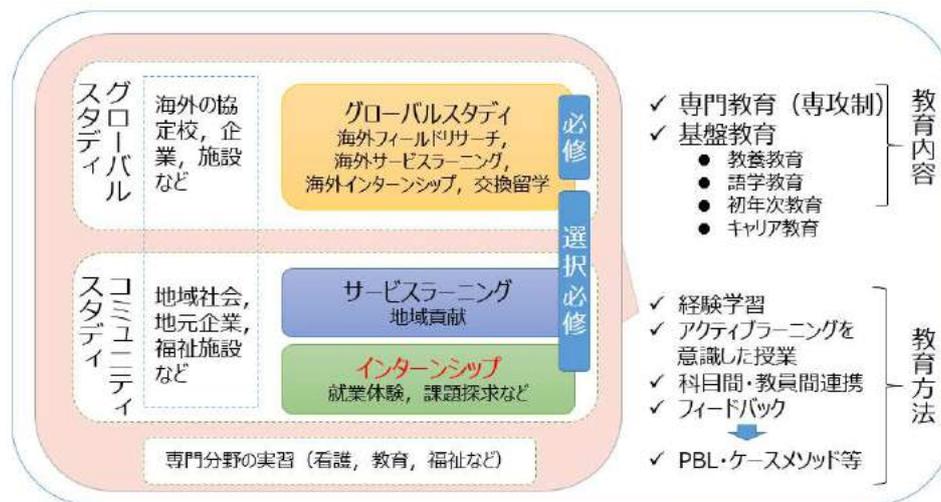


図1 教育課程・編成の方針の概要

各学科のカリキュラムは基盤教育科目と専門教育科目から構成する。基盤教育科目は本学で学習するための基盤、ならびに卒業後の人生を見据え、必要となってくる教養やスキルを修得する科目群であり、初年次教育、キャリア教育、語学教育もこの科目群に位置付けている。一方、専門教育科目は各学科の専門分野における知識・技能を修得する科目からなっており、学科ごとにさらに専門に特化した専攻を設定している。

教育方法については、全学的にアクティブ・ラーニングを導入する。教室で行う授業では、グループワークやディスカッションなどを取り入れている。また、教室外では、看護、教育、福祉の専門分野の実習のほか、グローバルスタディとコミュニティスタディの経験学習のプログラム（授業）を設定しており、国内外のサービラーニングやインターンシップのプログラムを開講している。看護学科を除くすべての学生に、グローバルスタディ、コミュニティスタディのプログラムから2つのプログラムを選択し、履修することを求めている。

これらの経験学習のうち、インターンシップを本取組のもう1つの柱として推進した。

さらに、本学における学修成果の評価ツールは、表1のとおりである。ルーブリックやテスト、学修行動調査、eポートフォリオを複合的に活用している。ここでは、とりわけ本取組で活用を推進した KUIS 学修ベンチマークと eポートフォリオについて述べる。

表1 学修成果の評価ツール

		大学の学び	
		専門的	汎用的
評価方法	直接的	<p style="text-align: center;">○学修ポートフォリオ (eポートフォリオやリフレクションカレッジによる 学修成果の蓄積状況の確認)</p>	
	間接的	<ul style="list-style-type: none"> ○卒業論文（ループリック） ○到達確認試験 （専門基礎知識の定着） ○教員採用試験 ○看護師等の国家試験など 	<ul style="list-style-type: none"> ○ループリック KUIS学修ベンチマーク ○テスト 言語的/非言語的思考力 日本語運用能力
		<ul style="list-style-type: none"> ○卒業率、単位修得状況 ○上記試験等の合格状況 ○GPAの状況 	<ul style="list-style-type: none"> ○学修行動調査 適応調査 大学IRコンソーシアム学生調査 (学修成果項目の集計)

3. 学修成果の可視化に関する取組

3-1. KUIS 学修ベンチマークと e ポートフォリオによる学生の PDCA サイクルの実質化

ベンチマークは前述のとおり、もともと学修到達度目標として作成したものである。現在は学位授与の方針に定める6つの学修成果の到達基準としてループリック形式で表現している。学生は年2回ベンチマークに基づいて到達状況のチェックを行っている。具体的には、春・秋学期開始前の3月末及び9月末の前学期成績評価ならびに採点済みレポート・試験答案を返却する「リフレクション・デイ」の日からおおむね2, 3週間間に、半年間のふりかえり→ベンチマークチェックによる到達状況の確認→次の半年間の目標設定、といった学生個人レベルの自己評価活動を行う。そのうえで、担当教員であるアドバイザーが学生と面談し、一人ひとりの評価活動の確認を行っている。いわば、学生レベルでのPDCAサイクルを実践しているのである。学生が行ったベンチマークチェックは本学の評価センターにおいて、全学あるいは学科ごとに集計を行い、マクロレベルあるいはミドルレベルの教育成果として評価に活用している。

一方、eポートフォリオは、導入当初、記事の作成の仕方など基本的な指導は行うものの、運用は学生の自律性に委ねていた。その結果、1年次には記事を作成するものの、上級学年では授業での指示を除いて、徐々に自発的に記事を投稿しなくなるという傾向が見られた。

そこで、学生個人レベルのPDCAサイクルを実質化するため、AP事業がスタートする前年に、eポートフォリオ上に半年間のふりかえりと目標設定を書き込むテンプレートである「成長確認シート」を構築した。

それでもなお改善は限定的であった。学生からは、評価活動を行う機会を授業の中で設定しなければ自律的に行うのは難しいとの意見が寄せられたこともあった。

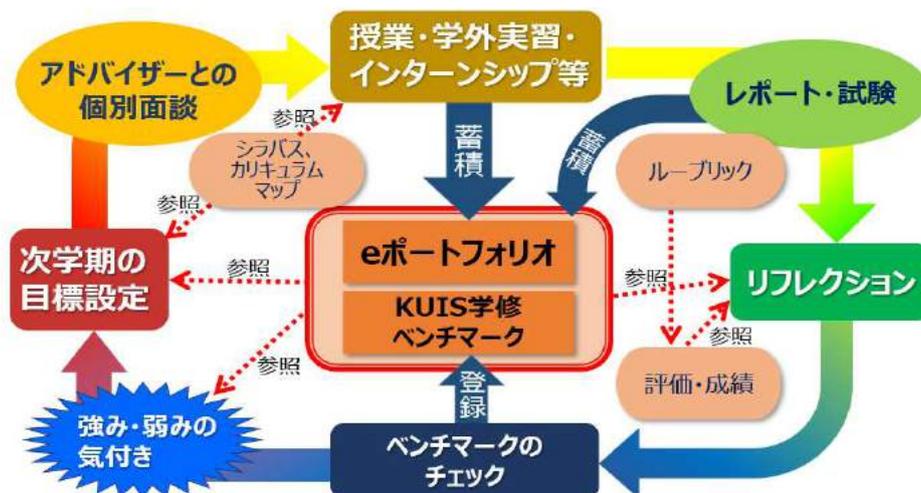


図2 学生個人レベルのPDCA

そこで、このPDCAサイクルをより実質的にするために2016年から「評価と実践Ⅰ」（1～2年次の2年間にわたる配当）及び「評価と実践Ⅱ」（3～4年次の2年間にわたる配当）というアセスメント科目（いずれも認定科目1単位）を開設した。

学生は自らのPDCAサイクルに基づく自己評価活動を、学習活動として4年間を通して実践し、計画的にeポートフォリオに学修の成果を蓄積していけるよう科目内容を設定した。また、学期の半ばには、PDCAサイクルをより有効にするためのワークや能力観や評価に関する知識を学ぶ授業内容を、各学年の春・秋学期に配置した。

評価と実践Ⅰ・Ⅱの授業内容は表2～表5のとおりである。

表2 評価と実践Ⅰ 1年春学期の内容

	主題	内容
第1週	基礎学力診断テスト	・ 全学共通テスト＝日本語運用能力、言語的思考力、非言語的思考力 ・ 1年担当(アドバイザー)は監督と一部採点
第2週	評価と実践Ⅰ第1回	・ 科目概要、ワーク、面談準備シート記入
第3～5週	アドバイザー面談	
第7週	図書館利用ガイダンス	・ 図書館の利用の仕方、文献検索の方法
第8週	グローバルスタディ説明	
第9週	評価と実践Ⅰ第2回	・ 客観的な見方・表現
第10～11週	評価と実践Ⅰ第3回、第4回	・ eポートフォリオとは、eポートフォリオ操作方法、成長確認シート(目標設定)、適応調査
第15週	評価と実践Ⅰ第5回	・ 春のふりかえり

表3 評価と実践Ⅰ 1年秋学期の内容

	主題	内容
リフレクションデイ	評価と実践Ⅰ第6回 リフレクション・ガイダンス	・ 学長講話、リフレクション説明、レポート・テスト返却確認、リフレクションワークシート(宿題)
第1週	評価と実践Ⅰ第7回 リフレクション・ワーク	・ KUIS学修ベンチマークチェック 成長確認シート(1年春夏)結果入力 成長確認シート(1年秋冬)目標設定
第2～4週	アドバイザー面談	
第8週	グローバルスタディ説明	
第9週	評価と実践Ⅰ第8回	・ 学びのゴールとプロセス、ラーニング・ルートマップ作成、適応調査
第10週	評価と実践Ⅰ第9回	・ 学びの評価
第15週	評価と実践Ⅰ第10回	・ 秋のふりかえり

表4 評価と実践Ⅰの学期中盤の内容

	主題	内容
1春	ポートフォリオの理解と利用の仕方 客観的な見方、表現	・ ポートフォリオの基本的な使い方と意義を理解する。 ・ 客観的な表現と主観的な表現の違いを理解する。
1秋	学びのゴール、プロセス、評価	・ 目標と計画の重要性について理解する。 ・ 4年間の計画を立てる＝ラーニング・ルートマップの作成。 ・ さまざまな評価方法について理解する。
2春	社会で求められる力	・ 社会人基礎力をとりあげ、KUIS学修ベンチマークに掲げるスキルが社会で必要とされていることを学ぶ。
2秋	ポートフォリオの点検	・ ポートフォリオに記録すべき内容や記述の仕方を点検、確認する。

表5 評価と実践Ⅱの学期中盤の内容

	主題	内容
3春	学修成果の統合	・ 教室での学びと経験学習により、これまでの成果と課題を確認する。
3秋	学修成果を他者に伝える	・ これまでに蓄積された学修成果をもとに、他者に伝えるサマリーを作成する。 ⇒コンテスト
4春	社会における評価と実践、世界の課題への対応	・ 社会で行われている評価について学ぶ。 ・ 世界における課題(SDGs)に対して自分たちに何が出来るかを考える。

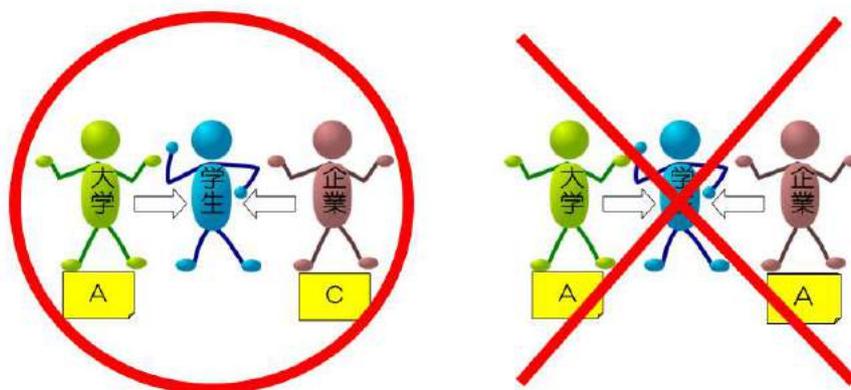
この科目ではeポートフォリオを積極的に活用することを目指した。その結果、記事の投稿数が表6のとおり増加した。

表6 eポートフォリオの記事投稿数の推移

年度	総件数	学生一人 当たり件数	前年度比
2014年度	5,646	3.00	—
2015年度	7,373	3.85	+31%
2016年度	8,566	4.07	+16%
2017年度	11,237	5.76	+31%
2018年度	14,360	7.00	+28%

3-2. ベンチマークのインターンシップでの活用と実習先企業の助言による改訂

前述のベンチマークは本取組のアクティブ・ラーニングとして位置付けているインターンシップにおいても利用している。インターンシップの受け入れ企業の担当者と本学のインターンシップ担当教員が実習の事前と事後に打ち合わせの際に、ベンチマークのルーブリック評価についてすり合わせ（カリブレーション）を行っているのである。具体的には、事前打ち合わせでは、業務内容の確認とともにベンチマーク項目のうち、どの項目について評価を行うのかを確認する。そして、事後打ち合わせでは、当該ベンチマークの評価結果から学生のどのような活動が評価されたのかについて確認を行っている。その際、お互いの評価観の違いを理解するよう話し合いを行うが、評価結果自体をいずれかに統一することは行っていない。



※カリブレーション＝評価の揃合わせでは、どちらかの評価に合わせるのではなく、評価の相違を認め合う。

図3 企業の受け入れ担当者と大学の担当教員とのカリブレーションのイメージ

ところで、本取組の初期には、インターンシップでベンチマークルーブリックを使用していた。これは本取組の協力者会議において、ベンチマークルーブリックはインターンシップに十分利用可能であるとの助言をいただいたからである。しかしながら、実際に使用した結果、受け入れ担当者からは知的好奇心など評価しづらい項目があるとの意見をいただいた。そのため、翌年のインターンシップでは、インターンシップ用にアレンジしたルーブリックを作成し、使用することになった。その一方、受け入れ担当者からいただいた意見をベンチマーク自体に反映させるとともに、学生自身が振り返りにより使いやすい文言に修正すべく 2017 年度中に改訂作業を行った。そして、2018 年 4 月に現行のベンチマークルーブリックをリリースし、再度、インターンシップにも活用することになった。



図4 KUIS学修ベンチマーク見直しの変遷

2018年に改訂されたベンチマークはインターンシップでも活用した。図4は2018年と2019年に課題探究型インターンシップに参加した学生10人を対象に、インターンシップへの参加前と参加後の自己評価、企業受け入れ担当者の評価、教員の評価について、項目ごとに平均値を求めたものである。標本数が少ないため一般化できないが、いずれの項目も学生の自己評価は参加前よりも参加後の方が上昇している項目が多いということと、教員の評価は学生の自己評価よりも高くなっていることが結果となって示されている。特に社会的貢献性と意見交換・調整力は学生本人の成長実感が高いだけでなく、企業の受け入れ担当者も高く評価している点が興味深い。

一方、問題解決力、専門的知識・技能の活用力は、いずれの企業受け入れ担当者も評価項目として挙げていない。また、論理的思考/判断力については評価がかなり低い。これは、インターンを会社で働く一員として見たときには、専門知識や経験が不足しており、またインターンの期間も短いことから、会社側が期待できるほどの成果を出せていないと思われる。この点を改善するためには、今後、長期のインターンシップを検討する必要がある。

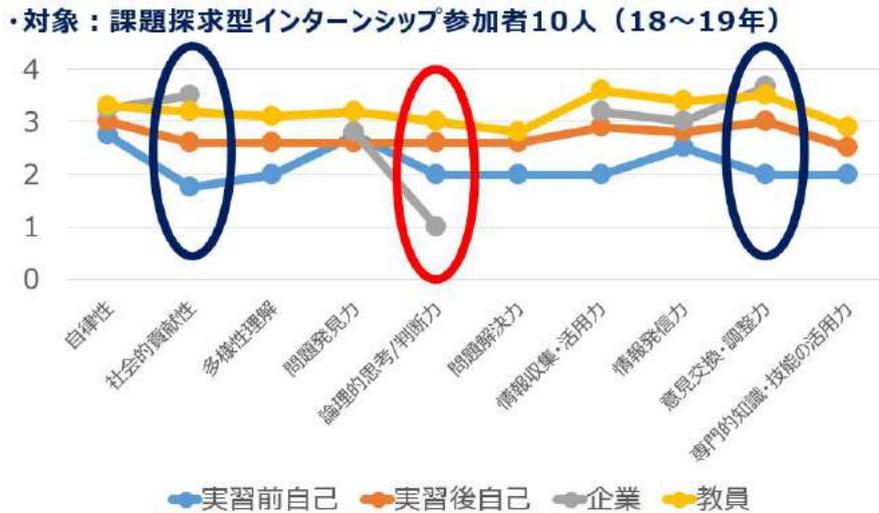


図5 ベンチマークの評価

3-3. 学修成果サマリーの構築

さらに、eポートフォリオに、これまでの履修科目やベンチマークの成長率とともに、様々な場面で作成した記事の中から自分の力を説明できる記事を選択し、学修成果サマリーにまとめるツールを開発した。いわゆる関西国際大学版のディプロマサプリメントである。最終的に、自分が培ってきた力を他者に説明できるようにするためのツールとして、今後活用を進めていく。

図6 様々な記事を学修成果サマリーに集約するイメージ

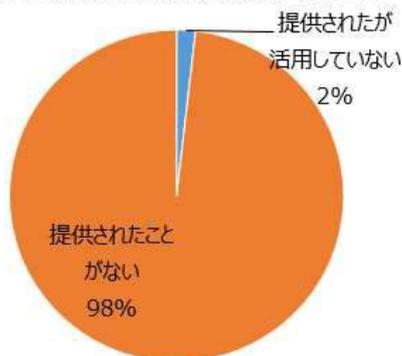
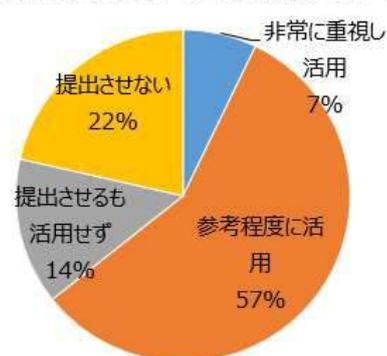


ディプロマサプリメントに関するアンケート調査結果

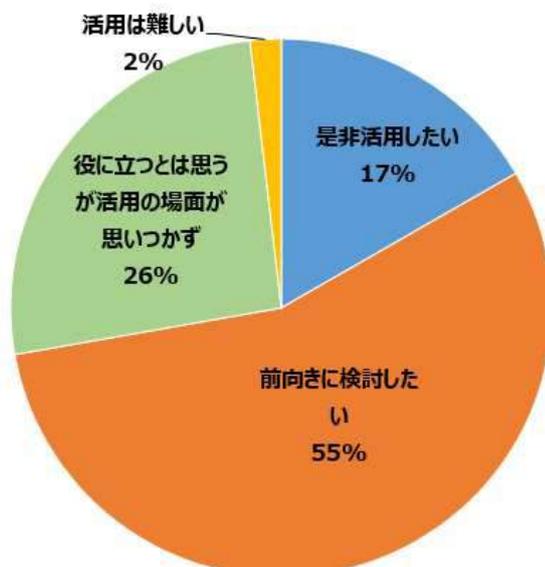
実施時期：2019年9月～2019年11月

実施対象：本学実績企業／求人を受けた京阪神の企業等365社

回答社数：56社（回答率15.3%）

Q:他大学からのディプロマサプリメントが
提出され活用した経験があるかQ:選考時、成績証明書など大学の成績
評価に係わる資料を重視しているか

企業はディプロマサプリメント提出の経験がなく、どんな資料かを理解していないという記載も多かった。またそもそも成績評価の活用も進んでいない。

Q:関西国際大学の学生からディプロマサプリメントが提出された場合、
採用選考に活用いただけるか？

＜活用可能企業からのご意見＞

- ・求める人材について（学生時代に於いて）どのように学び、成長してきたか、伺えることができる。
- ・従来の履歴書に比べ、人柄や客観的な能力の指標が具体的に示されている。
- ・学生の能力などを可視化することでグループディスカッション等の初期の選考時に役に立つ。
- ・まだ見たことがなく評価できないが、まずは使ってみたい。但し今のところあくまでも参考資料との位置づけ。

＜活用が難しい企業からのご意見＞

- ・各大学で記載項目が統一されていないため、評価しづらい。
- ・提出されない大学があれば同じ平等な比較が出来ない。
- ・提出資料が増えること自体にデメリットがある。
- ・入社後に成長し活躍する人物かどうか多面的に評価したい。
- ・記載内容の追加を聴く会社は多数と思います。
- ・ディプロマサプリメントになじみがない。

Q:関西国際大学版ディプロマサプリメントは下記の場面において、
それぞれどの程度役に立つと思うか？



採用試験段階では“役に立つ”の回答率が高いが、入社後活用は低下。

どちらかと言えば、採用数が少ない小規模企業の方が“役に立つ”感が高め。

以上のように、ディプロマサプリメントがどのような資料であるかも理解されておらず、そもそも成績証明書も参考程度にしか使用されていないことがわかった。利用可能性については、前向きに検討したいと考えている企業が多く、特に、比較的採用数の少ない小規模企業の方が役に立つと考えていることが分かった。

しかし、実際に関西国際大学版のディプロマサプリメントが活用され、定着していくためにはまだまだ改善が必要である。企業からは、以下のような意見が出されている。

ディプロマサプリメントの改善意見

- ・全国的なフォーマットの統一／他大学との記載項目に大きな差が生じていないこと。
- ・少なくとも過半数の大学が導入、活用していくこと。提出義務化への働きかけ。
- ・学生が当ツールを応募先企業に対し提出することを「当たり前」化していくこと。
- ・ディプロマサプリメントがどのような資料なのか周知が必要。サンプルを配布し、実用性を明確にすることで定着していく。
- ・単なる「学修成果の客観的な提示物」とならないように注意が必要。
- ・活用する企業を増やしていく。他大学やマイナビなどの業者にも相談して広げていく。
- ・もっとシンプルに必要な項目だけに絞られていたら、資料が増えても負担も少なく、活用しやすい。
- ・提出する学生としない学生が混在しないようにできればよい。
- ・履歴書だけでは見えない能力や個性を読み取り、きちんと活用していく企業側の体制も必要だと考えている。

4. むすびにかえて～学修成果と可視化に関する成果と課題

AP 事業によって特に学修成果の可視化に関し、成果と課題についてまとめたい。まず、成果については以下のとおりである。

まずは、全学の到達基準として活用している可視化ツールである「KUIS 学修ベンチマーク」について産業界の意見を取り入れて改訂できたことである。ベンチマークは学生の学習到達目標として開発されたものであるが、企業の意見を聞いて作成しておらず、そこにずれが生じていたと思われる。また、ベンチマークをインターンシップ評価に利用したことにより、社員の業績評価の参考にしていただけの企業もあった。本取組の1つの課題である大学と産業界のすり合わせの1つの成果として意義があると思われる。

2 つ目は学修成果サマリー（ディプロマサプリメント）である。e ポートフォリオは学修成果を蓄積するツールとして開発したが、当初はあまり活用できていなかった。しかしながら、アセスメント科目「評価と実践」の開設により記事投稿数が増加し、e ポートフォリオを自己の能力説明のツールとして拡張できたことにより、学生にとってもゴールが明確になったといえる。

一方で課題も多い。まずディプロマサプリメントについては全国的に就職活動で活用する機運が醸成されなければ普及しないであろう。そのためには、大学の特色を残しつつも、ある程度掲載基準などを大学間ですり合わせを行う必要があるかもしれない。

2 つ目は、学修成果サマリーの作成をゴールとする「評価と実践」の授業内容の改善である。授業の構成を変更するほか、SA や TA の活用も含め、作成支援体制を強化する必要がある。

3 つ目は、ルーブリックの目的養成系実習への活用である。ベンチマークは一般企業ではある程度対応できているが、たとえば、看護実習などでは専門性が重視されたり、命を預かる職業であることからより高度なスキルが要求される。そのためには、それぞれの職業に応じてルーブリックの基準を変えることも視野に入れる必要がある。